●第四節　証空の安心論

第一項　安心と三心

証空は安心という言葉を必ずしも起行と相対させて用いていない。もちろん概念的には相対させているのであるが、心は心、行は行と区別して考えていたと思われる。聖光、隆寛に比べ安心という言葉はより多用され、後世安心派と言われるほど安心を重視した姿勢が、その著作からうかがわれる。証空においても安心の内容は『観経』に説かれる三心そのものであり、三心という言葉も多用されるが安心と言う言葉を用いるのは、そこに常に三心以外の心を持つ行者を意識していたと言える。

『観経散善要義釈観門義鈔（以下『観門義』）』第一に安心を次のように定義している。

言二安心一未二仏法安レ心者。今安レ心也。直指二凡夫悪心一。不レ可レ有レ言安心一

つまり、仏法を聞いてそこに心を落ち着かせるのを安心と言っているのである。その安心によってすでに凡夫とは区別されるのである。

安心の内容については、短い文章では『選擇蜜要決』（以下『蜜要決』）巻第三に「三心者

心智也是安心也」（『浄全』八、二八四頁下）あるいは『観経秘決集』（以下『秘決集』）巻第十六に「三心者此安心故證得往生也」（『西全』一、三四七頁下）とあり、三心が安心の一部であることまではわかる。しかし、安心と三心が全く同一のものであるかどうかということは、さらに次の文を見なければならない。『秘決集』巻第十七に、

今釈二三心一如二経文一明レ之。於二三福一者。序正共細　釈家釈レ之其故者。三心者教二往生安心一故。不レ可レ有レ私。以二此三心一。定二往生得否一。故無二三心安心一者千中无一也

（『西全』一、三七四頁上）

とあり、往生の安心を三心と位置付けている。すなわち証空は仏教行者の心を安心、浄土往生を目指す行者の心を三心と、常に意識して使い分けていたことがうかがわれる。また、さらに細かくは平生往生の安心を三心とするのである。平生とは臨終と相対する語である。平生の安心とは『同書』によれば、

三心者平生往生安心也。専明二於心一。従二機方一待二臨終一。故三心為二往生体一也

（『西全』一、三七四頁）

平生為造二安心一念仏。来迎共勧二三心一造二安心一也

（『西全』一、三八〇頁下）

とある。臨終までの心構えの大切さを説いているのである。これについては平生の三心という言葉も出しているので、のちに述べたい。

以上から証空の考える安心とは、人間が仏法に触れることで、菩提心を含めた安心が心に形成され往生を願う心が生ずればそれは三心でなければならない、というものであろう。

次にここで起行との関係について明らかにする必要があろう。

第二項　安心と起行の関係

証空は虚仮の安心・真実の安心を立てる。『観門義』巻第一によれば、聖道出離の安心を虚仮の安心と言い、真実の安心を説明する（『西全』三、三一一九下～三二〇頁上）。自力を否定し弥陀の真実を知ることで、凡夫も真実となり真実の安心を持つと言う。

そこで凡夫が具すことの難しい聖道出離の安心を持った人の行を、

> 以其安心起行思生。日夜十二時心無間励身口悪性不断。十二時行皆雑毒也。定以雑毒行不可生也

として、往生できない行とする。ところが、その凡夫が、